（第３種郵便物認可）　建設工業新聞

週1回給水するだけで、幅1m×高さ1・8mの緑化を維持できる。

点灯虫では、春は蝶、夏は蛍、秋は赤とんぼ、冬は雪の結晶をイメージしたケースにLED照明を入れて点滅させる。その他のデザインにも対応できる。LED照明の消

# 正々堂々と「公共事業の雇用創出効果」を論ぜよ

## 人のためにこそコンクリートを

対談①

**はじめに**

『コンクリートから人へ』のスローガンの下、10年度の公共事業費は前年度比18・3％減の5兆7731億円にとどまり、32年ぶりの低水準に落ち込んだ。景気低迷に伴い民間建設投資の冷え込みも続き、建設業者の倒産は全産業全体で4分の1を占め、北陸など地方では3分の1強に達し、地域経済への影響も大きくなっている。その中で、『正々堂々と「公共事業の雇用創出効果」を論ぜよ～人のためにこそコンクリートを～』（発売／相模書房　定価800円税別）をこのほど、書き下ろした京都大学大学院工学研究科都市社会工学専攻教授の藤井聡氏。今回の著書の発刊に伴い、京都大学時代の学友である新日本コンサルタント（富山市吉作）社長で富山県測量設計協会理事の市森友明氏を訪ね、最近の公共事業を取り巻く逆風に対して、初めて土木の専門家が異議を唱えた。

土木専門家と、建設コンサルタント会社経営の両者が胸の内を熱く語った対談の内容を全6回に分けて紹介します。

藤井聡教授

市森友明社長

**沈黙は悪徳である**

**市森**　同じく土木工学科で、土木のことを学び、私は建設会社に入り、藤井は専門学の道を志したわけだが、その時、まさか、公共事業がこんなに世の中の批判に晒され、土木に世の中の逆風が吹くことになろうとは、夢にも思ってなかった。それを知らずに一生懸命に土木工学の勉強をしていた。そして世の中に出てみたら、意外や意外、どんどんと、そういう批判が強まっていった。ぼく自身はゼネコンに入って、主に地下鉄の計画・建設に携わってきた。1技術者として100、200億円程度のプロジェクトに参加してきたわけだが、作業員に至るまで、みんな本当に泥や汗まみれになってまじめに仕事をしていた。そこで現在指摘されているような、無駄な事業とか、土木に携わっている人が暴利をむさぼっているとか、そんな風なイメージを持たれるなんてことは、当事者としてはまったく考えたこともなく、社会資本整備に携われることを誇りに思ってきた。けれども今では、マスコミから簡単に「無駄だ」と指摘されたり、ニュース特番のキャスターには「こんな道路はいらない」「こんな橋はいらない」と報道されてしまう。でもそれらの報道は実際、中身に携わって一生懸命やっている人たちの本当の側面を捉えているのかというと決して捉えていない。土木技術者として非常に悔しく思っている。われわれ一人では如何ともし難い事実だが、それに対して、先生はどう思っているのか。

**藤井**　おっしゃる通り。今回、この本を出した直接の理由もその思いが一番中心にある。そこで、慎重に話をするならば、もちろん土木業界、建設業界の中に、一点の曇りもなく、清廉潔白か、というと、そうは言えない。価格談合はあっただろうし、それが無い場合でもそれに近いものは当然あっただろう。まあ、その有り無しについては、あっさりと認めてしまえばいいことだと思う。ただ、それがあったからこそ世の中のためになったことだってあっただろうし、善悪のうち、そうじゃない側面（善）の方が大多数を占めているのに、まったく世の中に伝わっていないのが残念だ。根元的に国のため、国家のため、地域のため、住民のため、という思いが当然ながら土木技術者の中にあって、いろいろな仕事、プロジェクトを進めてきた。もちろん、反省すべき点もあるので、少々過剰に言われても、われわれも悪いところがあったとの思いから、土木技術者はずっと黙ってきた。「これから望ましくない談合はなくして行こう」とか、「暴利をむさぼってきたわけではないが、努力する余地はないという訳ではなかっただろう」との思いから黙って努力してきた。しかし、今から思うと、そこでわれわれが黙っていたのが、害悪だったのではないか。「沈黙は金なり」「男は黙ってサッポロビール」と、そう呼ばれる世代にわれわれは生まれ育った。特に、土木技術者をはじめ、建設業界にとって「沈黙は美徳である」という美意識が非常に強くあった。しかし、途中から沈黙をしていることが悪徳になってきていた。なぜなら、現代社会では、不当なる批判をされている時に、黙っていれば、それは認めたことになってしまう。認めたことになってしまうと、後輩たちも先人たちも悪い奴らだ、と思われてしまう。だから、現世代では、発言すべき人間が黙ってしまうということは、実は、われわれ先輩達、後輩達、全員に対して迷惑をかけることになり、そういう意味で悪徳であったと思う。だから、途中までは沈黙は美徳であったけれども、ある時から、われわれは発言すべきであったにも関わらず、発言せずに来てしまった。そういう意味で沈黙は悪徳であった。発言こそが美徳である、というタイミングがどこかにあったはずだ。

**発言こそが美徳**

**市森**　そうなると発言するべきであったのは誰だったのか。例えば、われわれ、一民間の土木技術者がそれを発言しても限界があるわけで、どうすればよかったのか。

**藤井**　もちろん一つの教科書的な答えは、すべての土木技術者が、すべての立場で発言すべきだったという答えが一つあるとしよう。それは一見妥当性がありながら、実際にはいろんな甲乙関係があってあまりに発言すると、結局、「おまえは猫が鰹節を欲しがるように、鰹節をくれ、と言ってるだけではないのか？」となってしまう。政府関係者でも国交省でも同じ。単に財源が欲しいから発現しているのでは、と思われ兼ねない。そう考えると、本来は中立な立場の人間が言うべきだった。それが誰かというと、大学の人間であり、土木学会であり、学者が言うべきだったと思う。ぼくは、その気持ちがずっとあって、発言せねばならぬ、発言せねばならぬ、という思いから、今回の本を出版した。ここ7、8年書いてきたエッセイをまとめたものに、少し書き下ろしを足したものになっているが、ぼく個人としては、われわれこそが発言せねばならぬ、であろうという思いから、少しずつ発言してきたものをまとめた。やはり、中立に近い立場の人間が発言すべきだった。

もちろん、他の大多数の人間が発言しないでいいのかというと、おそらくは違うだろう。場合によっては、新聞とか雑誌、テレビ等での公の場での発言は難しいかもしれないが、業界関係者が集まる地域の小さな会合の席などで発言するべき機会があったはずで、そこで臆せず発言することが大事だったのではないか、と思う。

つづく

# 「社長が新たな沈黙」

## 創立40周年記念パーティー

同社は27日、創立40周年記念パーティーを金沢市の金沢国際ホテルで開き、森喜朗元首相や岡田直樹参院議員をはじめ、金融関係者、取引先、社員ら約250人が参加して節目を祝った。

冒頭、根上社長があいさつに立ち、「今、建設業界は淘汰の時代と言われるほど厳しい。これを第二の創業期ととらえ、さらなる改革を進め、お客様に安心して任せていただけるよう、地域スーパーゼネコン（SAC）に向かって情熱を持って

## 商工会議所会頭・副会頭会議

# 谷本知事が重点施策語る

石川県商工会議所連合会は27日、金沢市高岡の金沢ニューグランドホテルで石川県内7商工会議所の会頭・副会頭会議を開催した。この中で谷本正憲県知事が、6月補正予算を含む石川県の重点施策について講話。県水道送水管の2系統化と県立中央病院の全面建替えを「地域経済と安全・安心への対策」と位置付け、「景気浮揚に貢献できるのではないか」と期待を込めた。

耐震管を敷設する同送水管の総延長は約130キロ。整備期間は約20年で、単年度ごとに30億円程度を投入する予定。

一方、老朽化が著しい中央病院は「全国の県立中

平成22年7月28日付 建設工業新聞掲載

# 軽油に混

## 軽油路上に

福井県はこのほど、県内の主要幹線道路でトラックやダンプカー、タンクローリー車などの軽油路上採取調査を実施した結果、全114本のうち7本で混和の疑いを確認した。

5月と6月にそれぞれ1回実施した調査では、あわら市熊坂の国道8号で53本、敦賀市疋田の国道8号で61本を採取